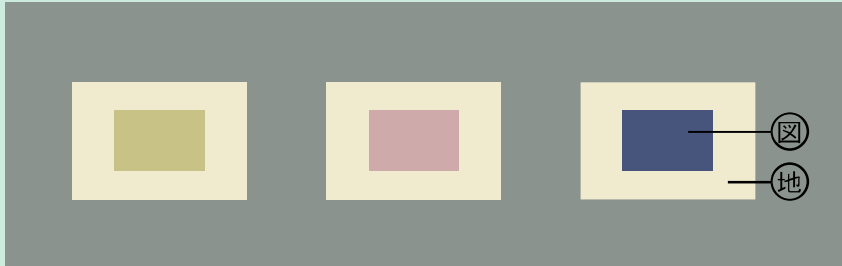


図2：色彩計画における配色基準



- i. 消去型
ground(地)とfigure(図)の同化
地と図がほとんど同色であるため、図は地にとけ込んでいる。
- ii. 融和型
ground(地)とfigure(図)の類似
地と図が類似色であるため、差があっても調和している。
- iii. 強調型
ground(地)とfigure(図)の反対
地に対してコントラストが大きく、図は目立って見える。

図3：3つの配色手法

* 配色の基本

● 色彩計画における配色基準 [→図2]

私たちは目線の角度を変えるだけで、近景から中景、遠景を同時に眺めることができます。その時、同時にいくつかの色を眺めて全体の配色バランスを考えることを習慣的に行っています。計画建築物等の周辺の土や石、少し離れて植物の葉や幹、もっと離れて山や空といった近景から遠景の変化が全体の配色イメージとして馴染んでいるかどうか重要な判断基準となります。配色を考える時の基準は、人を中心に組み合わせられる要素との距離によって変わります。

● イメージの調和を考えた3つの配色手法 [→図3]

建物などの人工物は、目立たせるのではなく季節毎に変化する花や樹木など自然の美しさを強調させるような効果を考えましょう。季節がダイナミックに変化する札幌の自然に調和させるためには、[消去型][融和型]になるように計画することが大切です。

□ ステップ2 計画建築物等の配色を考える

● 建物のカラーコンビネーションテクニック [→図4、図5]

- ・ 建物の高層部の色は、高明度・低彩度にして圧迫感を軽減する。 [→カラーチャートA~C]
- ・ アクセントカラーは、低層部（3階程度の高さ）までとする。 [→カラーチャートD~G]
- ・ 縦方向のアクセントカラーは、建物側面積の20%程度とする。 [→カラーチャートD~G]
- ・ 街並みの連続性に配慮する。

● 橋梁、高架橋、擁壁などの構造物

- ・ 周りとの調和に配慮する。
- ・ 中明度・低彩度にする。 [→カラーチャートB~D]
- ・ *無彩色の白に近づける。 [→カラーチャートA~B]
- ・ 薄い色味を使用する。

● 鉄塔、煙突などの構造物

- ・ 中明度の無彩色（グレー）を使い、周囲と同化させる。
- ・ 中間部・上部は無彩色の白に近づけるか、空の色と同化させて存在感を無くする。
- ・ 円筒形や四角錐等は無彩色に近い色を使い、周辺環境と同化させる。

※航空法第51条及び第51条の2等関係規定は除く（赤白表示等）

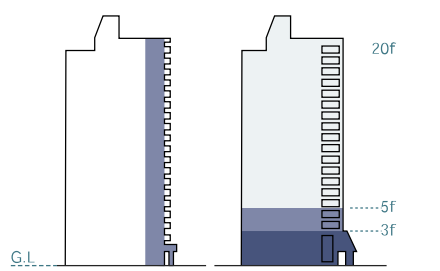


図4：有効な配色の割合（建物壁面でのめやす）

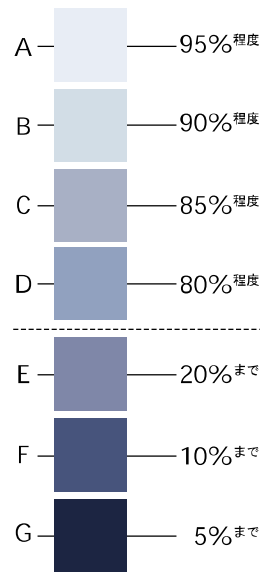


図5：各色の全体に対する使用面積のめやす（タテ第7列の場合） [→カラーチャート]

クール系：*寒色系の意味ではなく、一見同じように見える色でも微妙な色相の違いにより、クール系とウォーム系に区別される。（クールベージュ、ウォームベージュなど）

寒色系：寒い感じを与える色。*色相環では一般に緑～青紫（G～PB）をさす。
⇒ 暖色系=一般に赤紫～黄（RP～Y）をさす。

無彩色：白、黒、グレー

色相 [Hue]：その色が色相環の中で赤～黄～青のどの位置にあるかを示す。
明度 [Value]：色の明るさを示す。明度が最も高いのが白。最も低いのが黒。
彩度 [Chroma]：色のあざやかさを示す。彩度が高ければあざやかである。
トーン [Tone]：明暗、濃淡、派手地味など明度と彩度から生まれる色の調子。

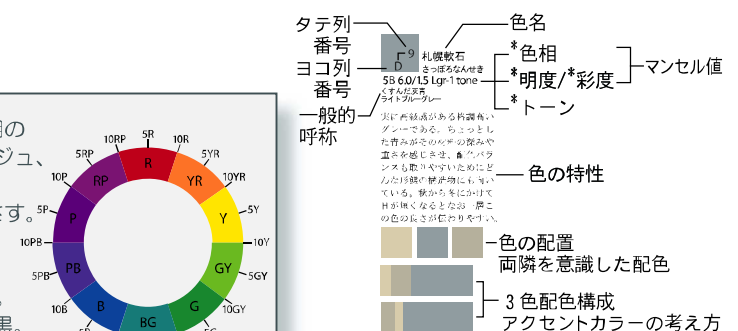


図6：カラーエッセンス70の見かた